

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 石黒 格

本論文は、ソーシャル・ネットワークがもたらす効果に関する社会心理学の視点からの理論分析・実証分析である。なかんずく人々の態度・意見や行動がソーシャル・ネットワークという構造そのものに規定されたものか、そこで生ずる認知的なバイアスに規定されたものかを分析の対象としている。つまり、人はネットワークの中で得られる情報をもとに能動的にその適否を判断し、それを自らの態度形成や意思決定に用いており、ネットワークから影響を受けるのはネットワークの情報分布のバイアスに留まるのか、あるいはそうした過程は能動的にではなく構造的に意識の外で規定されており、人々は自らのおかれた情報環境のバイアスを認識しておらず、意識の外での同調行動として構造の影響は現れるのか、これを検討の対象としている。この研究のもたらすメリットは、認知的な過程と構造的な過程の区別を十分に行ってこなかった諸種の研究を評価する枠組みを提供することにとどまらず、社会的影響力と能動的な社会参加という民主主義の基本問題を議論しうるところにまで及ぶ。

論文では第1章において、これら二つの効果を必ずしも判別せずに議論してきた視点が文脈効果と名付けられ、その歴史的な研究の経緯をたどることで研究手法の問題点が指摘され、新たな研究へのアプローチが提唱される。第2章では、この課題が世論調査の手段を用いながらも、分析の単位を個人から広げることが示される。すなわち、調査の当該対象個人の周囲の第一次的なネットワークを占める他者自身のデータを取得するスノーボール・サンプリングテクニックを用いることによって、個人の主観的な情報環境認知とその環境そのものを構成する他者の意見や行動の実データ（当該個人にとっては客観データ）を取得して進められることが述べられ、実証上の手続きと人々の態度形成を対象とした基本的な分析が記述される。第3章はこれに続く応用課題として、人々の社会的知識の規定要因が検討される。第4章ではこれら全体を受け、民主主義システムの中でその熟考性を高めるモメントとして、人々が他者から知識量を補完され、なおかつ能動的で独立した判断を保ち得ているのかが、検討される。さらに第5章ではこの分析がジェンダーのバイアスという視点から分析され、社会において女性の政治的な影響力が限定されていることが実証される。最終章はこれら結果のもたらす意味の検討である。

結果として本論文は、これまでの態度研究やソーシャル・ネットワーク研究単体での研究の欠陥をつき、かつ高度な世論調査手法を通じて同調と情報バイアスに関わる諸仮説の実証を果たしている。仮に問題ありとすれば、集団におけるいま一つの根本概念である社会規範の問題に触れ得ていない点であろうが、これは今後の課題としておきたい。以上によって著者が研究者として十分な能力を有することが示されているので、本審査委員会は博士（社会心理学）の学位を授与するに値するものと判断する。